

異文化コミュニケーション研究所

2009年度活動報告

(1) 研究プロジェクト紹介

●変容する異文化接触場面とグローバリゼーションの行方（新規）

代表：サウクエン・ファン（本学留学生別科別科長・国際コミュニケーション学科教授）

研究協力者：石田由美子（本学留学生別科非常勤講師）

高 民定（千葉大学文学部准教授）

齋藤真美（本学留学生別科専任講師）

中川康弘（本学留学生別科専任講師）

村岡英裕（千葉大学文学部教授）

〈研究概要〉

本研究は、グローバリゼーションの浸透とともに日本滞在が長期化しつつある外国人の言語問題（コミュニケーション問題を含む）に対する言語教育、言語政策を考えるための理論的な枠組を構築することを目的とする。外国人の言語問題に関しては従来、マクロな視点からは言語政策、移民教育、多文化共生社会の枠組で、またミクロな視点からは異文化コミュニケーションあるいは接触場面研究の枠組で扱われてきた。本研究では、従来、「日本語母語話者－日本語非母語話者」という範疇から研究されることの多かった接触場面研究に対して、そうした範疇に収まりきれない外国人居住者（例えば、日本語を含む複数の言語を日常的に使用する人、あるいは日本語を使用しない人）の言語問題を「接触場面の変容」として捉え直す。また、彼らの出身地域における言語環境の特徴を考慮し、特定の言語環境に影響を受けた1人の言語使用者としての外国人の言語問題を扱

う、ミクロとマクロの両方の視点を取り入れた接触場面の新たな枠組を創出する。

主な研究活動の予定としては、毎年度4-5回の研究会を神田外語大学または千葉大学で開催する。研究会では、専門家のみならず、生活者としての外国人を招き、内省報告や、話題提供などを通して、研究のネットワークを拡げていきたい。

また、国内調査では対象とする外国人居住者は非英語圏出身とし、出身地域によって抽出し、彼らの経験してきた言語環境と現在の日本での言語問題を明らかにする。出身地域の言語環境のタイプにバラエティを持たせるために香港、韓国、東ヨーロッパ、ベトナム、フィリピンの5つの地域の外国人を中心とする。また、日本社会における接触場面の全容を明らかにするために、ホスト側の日本人の言語使用の実態と言語意識についても調査を行う予定である。

●「ビジネス・エシックス」(新規)

代表: ギブソン松井佳子(本学異文化コミュニケーション研究所所長・英米語学科教授)

研究協力者: 加藤泰史(南山大学)

勝西良典(上智大学)

島田信吾(デュッセルドルフ大学)

モースミュラー(ミュンヘン大学)

〈研究概要〉

実施期間は4年間である。本年度2月に本研究所主催のシンポジウムを開催した(後述の(4)を参照のこと)。

●「東アジアの経済統合をめぐる人の移動」(継続)

代表: 奥島美夏(本学異文化コミュニケーション研究所講師)

研究協力者：岩井美佐紀（本学国際言語文化学科准教授）

大木博文（拓殖大学非常勤講師）

小高 泰（拓殖大学非常勤講師）

鈴木伸枝（千葉大学文学部教授）

中川康弘（本学留学生別科講師）

新美達也（中央大学大学院博士課程）

服部美奈（名古屋大学大学院准教授）

林 史樹（本学韓国語学科准教授）

吉田正紀（日本大学国際関係学部教授）

〈研究概要〉

本年度は医療・福祉人材を中心的研究対象として、研究者の打ち合わせ会議を幾度か行い、2月に本研究所主催の公開ワークショップを開催した（後述の(4)参照のこと）。また、プロジェクト代表は東京外国語大学多言語・多文化教育センター、品川シルバー大学、拓殖大学大学院国際協力学研究科、NINDJA（インドネシア民主化支援ネットワーク）、インドネシア大学・京都大学東南アジア研究所共催国際シンポジウムなどでの講演・特別講義を通じて成果の社会還元にも努めた。

関連プロジェクトである文部科学省科学研究費補助金（基盤 B 海外、課題番号 20401047）「東アジアにみるインドネシア・ベトナム女性移民の急増と家事介護労働者―花嫁間の推移」（研究代表者：奥島美夏、平成 20～22 年度）も並行して進んでいる。

さらに比較研究として、本年度から千葉県内在住の東南アジア出身者（フィリピン人、ベトナム人、インドネシア人）と、彼らを取り巻く中南米人や韓国人などからなるコミュニティの予備調査も開始しており、本学学生による日本語学習支援チームの引率・指導も行った。上記研究者の一部が編成した研究チームは「平成 21 年度千葉県多文化共生社会づくり推進モデル事業に採択された（県庁ウェブサイト「ちば国際情勢ひろば」参照）。

●国際文化振興会と「幻の英文日本百科事典」（継続）

代表: 和田 純(本学異文化コミュニケーション研究所特別顧問・国際コミュニケーション学科教授)

〈研究概要〉 関連資料の収集・分析を継続した。

●戦後日本の国際交流と文化外交(継続)

代表: 和田 純(同上)

〈研究概要〉 近年のものまで含めて資料の整理・分析を継続した。

(2) 調査プロジェクト

●国立公文書館アジア歴史資料センター委託「日本国内所在の主要アジア歴史資料」(最終年度)

代表: 和田 純(本学異文化コミュニケーション研究所特別顧問・国際コミュニケーション学科教授)

〈調査概要〉 和田と土田宏成(本学国際コミュニケーション学科准教授)で実施して来た3年間の調査結果を取り纏め、アジア歴史資料センターのホームページから「国内所在資料調査報告書」(<http://www.jacar.go.jp/houkoku/houkoku.html>)として公開した。

(3) 学内講演会報告

●第56回(6月4日)「Perceiving Intercultural Communication: The Gifts of E.T. Hall (異文化コミュニケーションを考える—E.T. Hallからの贈り物)」

ジョン・コンドン(米国ニューメキシコ大学リージェント教授)

異文化コミュニケーション分野の草分けであり『沈黙のことはば (*The Silent Language*)』(日本語訳初出 1966 年、南雲堂)の著者としても知られる文化人類学者エドワード・T・ホール(1914-2009)は、講師の長年の知己で、アメリカ・ノースウエスタン大学時代の同僚でもあった。同掲書が出版 50 周年を迎えた本年、著者はこの世を去った。講師は存命中必ずしも文化人類学会で高く評価されていなかった彼の業績を振り返り、人間が日常生活の中で時間・空間・動作・学習といったコミュニケーションの様々な局面をどのように認識・実践し、それらの総体としての「文化」を構築しているのかを次世代に伝えた。

ホールはニューメキシコの多様な言語・文化環境の中で育ち、早期からこうした異なる背景をもつ人々の言語活動と文化的所作の関係に興味をもっていた。この一連のセットをホールは非言語的諸側面をも含めた広義の「コミュニケーション」ととらえ、社会文化面だけでなく生物学・動物行動学的な要素をも考慮する研究手法を確立した。すなわち、「文化はコミュニケーションであり、人間として変えがたい生物学的習性、一定の文化圏に属する者に共通する行動パターン、そして個人差・個体差という 3 つの認識レベルが脳内に埋め込まれているとした。これらに沿って人が行動した結果、対人関係の親密度や葛藤などを反映したいくつかの距離や場、間／タイミングのパターンが生まれる。ホールはこの「かくれた次元」がある程度通文化的な現象ではないかと考え、多国籍企業における社員間のコミュニケーションなどを観察・分析していった。今日ではその全てが評価されているわけではないが、人間の本能に分かちがたく結びついている「文化」の一端を指摘した意義は大きい。

なお、講師自身も異文化コミュニケーション分野のパイオニアの一人で、ニューメキシコ大学では最高位 (Regent Professor) に叙せられている。当分野初の大学生向け教材や関連書は、日本語を含む 7 言語に翻訳され広く支持され、アジア・アフリカ・南米諸国でも後進の指導にあたっている。

〈参考〉

ジョン・コンドン (近藤千恵訳) 1980 『異文化コミュニケーション——カ

ルチャー・ギャップの理解』サイマル出版会。

●第57回(6月12日)「通訳へ至るケモノ道——はみ出したって大丈夫」
柴原智幸(本学英米語学科講師)

講師の柴原氏は大学で英語学を専攻し、英会話講師・進学塾講師などを
経て渡英、バース大学の大学院通訳翻訳コース修士課程を修了してから
BBC(英国放送協会)で放送通訳として勤務した。2002年に帰国した後、
大学・専門学校などでの講師として、またNHK放送通訳者・映像翻訳者
として活躍し、本年度より当大学に就任した。夫人も同じくBBCで活躍
された通訳の専門家である。

夫妻ともに華やかなキャリアの持ち主であるにもかかわらず、講師によ
れば若い時は何度も逡巡し、人生の岐路に立って悩んだことがあったとい
う。家族が高校の英語教員であったため、早くから語学を専門とする職業
を考えていたものの、入学した大学の外国語学部では学習についてゆけず
2回留年した。それでも、通訳をめざして英会話講師をしながら通訳学校
に通い、大学卒業後すぐに仕事を得たが、あまりの難しさ・厳しさに再び
自信を失い、通訳になるのをいったん断念した。失意のうちに塾・英会話
学校での教職に戻ったが、その後、大学の恩師が上記バース大学の通訳・
翻訳コースを立ち上げたという話を聞いて留学した。

修士課程を終えてBBC日本語部へ入社してからは、世界各国のニュー
スを同時通訳するなどの作業にチームであたってきたが、時事問題や科
学・医学用語など多様な専門知識を要求されるので、やはり日々の修練が
不可欠になる。同時に、瞬時に聞き取りきれない外国語を自信のないまま
あやふやに訳すよりも、理解できたことを確実に聞き手に伝える誠実さも
要求される。このような苦労を重ねながらも、それを楽しみ、通訳・翻訳
の喜びを味わえるようになるまでは随分時間がかかったという。だが、若
い頃に何度も挫折を経験したことから、講師はいわゆる「王道」「正統派」
をゆく優等生ではない若者たちの生き方をも肯定し、本当に好きなことを
諦めない限り、どんな「ケモノ道」からでも夢に辿り着くことができる、

と講堂に集まった多くの学生たちに呼びかけた。

- 第 58 回 (6 月 16 日) 〈シリーズ: 親密圏の異文化問題を考える〉第 1 回
「留学生たちと一緒に本音で語ろう! 異文化友情、異文化恋愛、異文化結婚の虚像と実像」

黄 シネ (本学留学生別科学生・韓国出身)

スコット・スフォード・ブライル (本学留学生別科学生・英国出身)

アロン・M・ロマニク (本学留学生別科学生・米国出身)

渡辺あづさ (本学英米語学科学生)

石黒裕夏 (本学国際コミュニケーション学科学生)

藤井友美子 (本学国際言語文化学科ベトナム語専攻学生)

近年の日本では多国籍化・多文化化が進み、さまざまな国籍や文化をもった人々との接触や交流も日常茶飯事となっている。私たちの「親密圏」にも異文化をもつ人々が増えてきているが、意外に私たちは実情を知らない。本シリーズ「親密圏の異文化問題を考える」はこうした問題を本音で話しあえる等身大のチャンスとして企画した。第 1 回目にあたる本会では、韓国・イギリス・アメリカからの留学生 3 名と日本人学生 3 名 (日本国籍取得者含む) の計 6 名をパネラーに迎え、ギブソン松井佳子本研究所所長の司会進行によりディスカッションを行った。

外語専攻の教育機関では教職員・学生とも全般に海外志向が強く、留学経験者や帰国子女ばかりでなく、ダブル (ハーフ) や日系人、オールドカマーや帰化者など多様な民族・文化的出自をもつ者が多い。互いの多様性を認め合い、自らの特色としてアピールできる自由闊達な雰囲気があるなかで、パネラーとなった 6 名は留学の動機や国際結婚への憧れ、語学指導者や国連職員等の将来設計を語りながら、そこに両親やいとこ、近所の友人など身近な人々から受けた影響が大きいことをそれぞれ再認識していたのが興味深い。こうした原体験をもつ若者たちが、諸国で学び、その体験を周囲にも伝えてゆくことが期待される。

●第59回 (11月10日) 「カントの『永遠平和のために』を読み直す——
グローバルな公共性の構築に向けて」

加藤泰史 (南山大学外国語学部教授)

グローバリゼーションの進展、特に IT 関連技術や交通手段などの急速な発展により、人・物・情報がいとも簡単に世界を駆けめぐることができるようになったものの、世界平和の実現には未だ遠い道のりである。これは世界平和の構築を可能とするグローバルな「法の支配」が確立されていないためであるが、そのような性質の「法」とはどのようなものだろうか。

講師は 1991～93 年にドイツ・ミュンヘン大学で客員研究員として近現代哲学の研究に没頭した。いわゆる「三批判書」で知られるドイツ哲学の大家イマヌエル・カント (1724-1804) は、18 世紀末にすでにグローバリゼーションのかすかな予兆を読み取り、「永遠平和論」を提唱していた。この思想は現代日本の生活空間、すなわち日本国憲法第 9 条にも影響を及ぼしている。

17 世紀以降のヨーロッパで確立された国民国家と国境の概念は、現代世界で巨大化する多国籍企業存在に圧倒され、一国内の「企業の社会的責任 (CSR: Corporate Social Responsibility)」を超えた新たな国際規範としての「国連グローバル・コンパクト (GC) (1999 年～) への参加と人権・労働・環境などに関する 10 原則の支持が求められるようになった。そして今、さらなるテロ抑止や歴史的に「国際法的他者」とみなされてきた少数民族などや個人の権利保護などをめざした「グローバルな法の支配」、すなわち世界市民法による人類の連帯と平和の実現が提唱されているのである。カントの『永遠平和のために』は、「世界市民法は、普遍的な有効をもたらす諸条件に制限されなければならない……外国人が要求できるのは、客人の権利ではなくて訪問の権利である」と最小限の法的制約にとどめつつも、構造的暴力の解消や常備軍の全廃、戦争権の否認などを謳う未来派の思想として、今なお学ぶところが大きいのである。

〈参考〉

坂部恵・有福孝岳・牧野英二(編) 2000～2006 『カント全集』第2・17・別巻(岩波書店)。

加藤泰史 2009 「現代社会における『尊厳の毀損』としての貧困」『哲学』第60号。

●第60回(11月16日)〈シリーズ: 親密圏の異文化問題を考える〉第2回
「〈異文化間友情〉について留学生たちと一緒に本音で語ろう！」

チャ・ダレ(本学留学生別科学生・韓国出身)

ホッシャ・ノゲイラ・ウーゴ(本学留学生別科学生・ブラジル出身)

村上愛美(本学英米語学科学生)

富貴大介(本学英米語学科学生)

深田美紀(本学英米語学科学生)

シリーズ第2回にあたる今回は、本大学で学ぶ200名を越える留学生自身を事例として、日本人学生たちとの間にどのように友好関係を築いているのか、そのためには何が必要で、どのようなトラブルや葛藤を経験してきたのかを紹介・論議してもらった。

パネリストとなった5人の学生たちは、外国語・外国文化に興味をもっているばかりでなく、趣味・アルバイト・将来の職業に向けた準備などにおいても、茶道・演奏活動・海外ボランティア・児童教育など多彩な活動に携わってきた。こうした体験を通じて日々出会う人々との交流がすべてある種の「異文化体験」であり、自身の視座を広げるとともに多様な出自・意見をもつ他者と共生してゆく術を学ぶ貴重な機会であることを認識していることが何より重要である。これを基盤として、他者を理解し尊重しようとする姿勢が生まれ、摩擦が生じた際にも一歩下がって冷静に分析し、時には楽しむことさえできるようになってゆくという。

また、性別や個人的な見解の違いによる摩擦が、ともすると国籍や文化の違いによる摩擦にすり替えられがちになるという現実や、海外の留学生同士の交流のように異なる言語話者たちが第三国で共同生活を営む難しさ

についても指摘があった。こうした場面でどのように対処したのかを各自の経験に基づいて語り、意見交換・批判的検討を経ることが、「国際交流」といった聞こえはよいが曖昧な言葉だけではすまなくなった現代社会の半恒久的多文化共生に正面から取り組み、実践してゆくことなのである。

●第61回(12月9日)「韓国宮中料理と現代の食文化」

林 三樹夫(李朝薬膳料理店「カヤグム」料理長)

南青山にある李朝薬膳料理店「伽耶琴(カヤグム)」料理長の林三樹夫氏を招き、「韓国宮中料理と現代の食文化」というタイトルで講演会を開催した。講演の形態に関しては、60枚に及ぶ画像資料を紹介しながら、基本的な説明を林三樹夫氏が行い、随時、韓国語学科教員の林史樹が補足するかたちで進化した。講演に際しては、学生・一般を合わせて100名を越える参加者全員にスジョンガ(シナモンと生姜の飲み物)と創作焼き菓子が配られ、エゴマの実・なつめと柚子の皮の入った2種の焼き菓子はとてもおいしいと大評判であった。

林三樹夫氏の話は以下のような順序で行われた。①自己紹介、韓国料理に魅了され、渡韓した理由。②韓国での生活と食生活、韓国料理店での仕事。③宮中料理の魅力と特徴、宮中料理店での仕事。④現在の仕事、お店の紹介である。

① まず渡韓に至る経緯については、食にもとから関心があったところ、学生時代に焼肉店でアルバイトをしたのがきっかけであるらしい。知人を介して卒業旅行として韓国に渡航し、そこで韓国の一般家庭料理にふれたことが現在の道を選択させた。内定を得ていた企業に断りを入れての渡航であった。

② 韓国では、初渡航の際に魅了された韓国料理を習うべく、いくつかの専門店を渡り歩いて経験を積んだ後、韓国料理店「精誠本」で修行をした。そして、韓国で調理師免許を取得し、その後は薬膳料理店・宮中料理店などでも修行している。これらの経緯を、食生活にまつわるエピソードも交えながら行った。

③ 宮廷料理と宮中料理の違いについて述べ、準備したレジュメにそって宮中料理に取り入れられた陰陽五行についての説明がある。その後には食材としての唐辛子の由来や味つけについての説明があり、韓熙順・黄慧性・韓福麗姉妹らの人物紹介とともに宮中料理の系譜について紹介がある。これらの話に、随時、日本の韓国宮中料理店としてあげられる「チファジャ」での研修経験なども盛り込まれた。

④ 最後は、現在、李朝葉膳料理の料理長として、どのように宮中料理と接しているか、また店舗の紹介などがあり、さまざまな創作料理などがスライドと一緒に披露された。

講演後は質疑応答に時間を割いたが、フロアから料理や食材の変遷はもとより、具体的な調理法についてまで、学生や一般聴講者を問わず、活発な議論が繰り広げられた。多岐にわたる質問に一つ一つ丁寧に答えていたのが印象的であった。
(林史樹・韓国語学科准教授)

●第 62 回 (12 月 8 日) 「日本的企業経営の真髄——持続的成長の原動力と内在する倫理的課題」

西藤 輝 (中央大学総合政策学部招聘講師)

元住友商事株式会社理事である講師は、ロシア (旧ソ連)、インドネシア、ドイツ、イランの 4 カ国に通算 12 年間駐在していた。現在は日本経営倫理学会常務理事 (国際研究交流) も務め、近年の断続的な不況に伴って叫ばれるようになった企業の社会的責任 (CSR: Corporate Social Responsibility) や説明責任 (Accountability) などの指導に取り組んでいる。

現代のグローバル経済下では端的に「なぜ、ある国は豊かで、ある国は貧困なのか?」「豊かさや貧困の相違をもたらす要因は一体何なのか?」などを疑問視したくなる。天然資源に恵まれず、異文化・異文明との接触が「鎖国」を含め歴史的には非常に限られてきた日本が、なぜ 1970 年代以降、約 40 年にわたり米国に次ぐ世界第二の経済大国であり続けたのかを、池上映子は *THE TAMING OF THE SAMURAI* (Harvard University Press, 1997) で「日本の謎 (the enigma of Japan)」と指摘した。講師はそうした

日本経済発展の背景と日本企業の持続的成長の原動力を、(1)創業精神・経営理念、(2)日本の経営、(3)伝統的遺伝子の継承と異文化遺伝子受容、の3つの視点から分析した。

(1)は住友商事やトヨタ自動車などにみるように、主要国内企業の多くがかつての武家・商家などに典型的な家訓から店則・社訓へと発展した経営指針をもっており、原則として今日に至るまで貫いている。次に、これらの企業が持続的に成長するためには、(2)にあたる創業精神・経営理念などの共有、愛社精神、運命共同体としての認識と結束力が不可欠であるという。これらは終身雇用制や年功序列、企業内組合や入社などという方法で維持されているが、反対に過度な愛社精神や上下関係がヤミ残業や過労死、官製談合や天下りなどという問題となって表出している。

こうした課題を解決するためには、(3)の良い伝統を維持・展開してゆくと同時に、コーポレート・ガバナンスやコンプライアンス経営の徹底によって透明性がより高く社員重視の企業へと進化してゆかなければならない。こうしたハイブリッドにして社会的責任能力の高い企業が21世紀の日本に求められているのである。

〈参考〉Akira SAITO, 2007, 'Bushido,' Encyclopedia of Business Ethics and Society. California; SAGE Publishers.

(4) その他のシンポジウムなど

●国際シンポジウム「ビジネス・エシックスを多角的に考える」

(2010年2月12日・13日、神田外語大学ミレニアムハウス)

主催：神田外語大学異文化コミュニケーション研究所

後援：日本経営倫理学会

〈第1日目〉

基調講演「企業経営におけるガバナンスの意義」

荻野博司(朝日新聞マネジャー、地球環境プロジェクトリーダー、

異文化コミュニケーション研究所 2009 年度活動報告

元論説委員)

パネル・ディスカッション「企業の社会的責任 (CSR) の現状」

司会: 田中宏司氏 (日本経営倫理学会副会長)

パネリスト: 河口洋徳 (キヤノンマーケティングジャパン株式会社 CSR 推進本部長)

岡田佳男 (雪印乳業株式会社常勤監査役、元コンプライアンス部長)

萩野博司

記念講演「多様性のビジネス・ケース——日本とドイツの比較」

カロリーナ・グリーンシュロス (ヘンケルジャパン株式会社)

〈第 2 日目〉

パネル・ディスカッション「ビジネスとケア——ビジネス・エシックスへの新しい倫理的アプローチ」

司会／コーディネータ／パネリスト: 加藤泰史 (南山大学)

パネリスト: 浜渦辰二 (大阪大学)

田中朋弘 (熊本大学)

勝西良典 (上智大学)

山中 裕 (三菱ケミカルホールディングス内部統制推進室部長)

パネル・ディスカッション「ビジネス・エシックスをめぐる思想的アプローチ」

司会／コーディネータ: ギブソン松井佳子 (神田外語大学)

提題者／パネリスト: 葛 建華 (中国政法大学商学院)

パネリスト: 西藤 輝 (中央大学総合政策学部招聘講師)

カロリーナ・グリーンシュロス

パネル・ディスカッション「ビジネス・エシックスにおける異文化間コンフリクトを考える」

司会／コーディネータ: ギブソン松井佳子

提題者／パネリスト: アロイス・モースミュラー (ミュンヘン大

学)

パネリスト: 島田信吾(デュッセルドルフ大学)

シルビア・ゴンザレス(神田外語大学)

本シンポジウムは、日本・中国・ドイツ・ベネズエラの哲学者・文学者・社会学者・経営学者・コミュニケーション学者・ジャーナリスト・企業関係者・院生・学生などといった多彩な参加者を得て行われた。

第1日目の荻野博司氏の基調講演では、コーポレート・ガバナンスに関して、例えば社外取締役の導入といった制度を形式的に立ち上げるだけでは十分ではなく、制度をいかに運用するのかという問題の重要性が、日興コーディアルグループなどの事例に即して説得的に示された。続くパネル・ディスカッションでは、河口洋徳氏と岡田佳男氏から、CSRのキャロルの博愛主義的理解に対して本業こそがCSRである点と、不祥事を教訓にして雪印がどのようにCSRに取り組んでいるのかについて紹介がなされ、荻野氏が朝日新聞の事例を踏まえながらコメントした。最後のグリェンシュロス氏の記念講演では、現代のビジネスにおける多様性の重要性が強調され、多様性に関して日本とドイツの企業の現状分析及比較が提示されて日本企業の遅れが指摘された。

第2日目は3つのパネル・ディスカッションが行われた。最初の「ビジネスとケア——ビジネス・エシックスへの新しい倫理的アプローチ」では、哲学者の加藤泰史・田中朋弘・浜渦辰二の三氏から、ケア倫理学の問題提起をビジネス・エシックスにどのように活かすのか、CSRやCC理解にいかなるパラダイム転換を引き起こすことが出来るのかといった問題提起がなされ、それに対して勝西良典氏と山中裕氏から質疑・コメントがなされた。続くパネル・ディスカッション「ビジネス・エシックスをめぐる思想的アプローチ」では、葛建華氏から現代中国の直面する企業倫理の諸問題が具体的な事例に即して説明され、中国の伝統的倫理の重要性が強調された。これはドイツ・ジューメンスの前CEOのフォン・ピーラーの見解とも通底するところがあると言えよう。そして西藤輝氏からは、アングロ・アメリカ型資本主義の直面する諸問題に対して伝統的日本思想が持つ

意義が強調された。最後のパネル・ディスカッション「ビジネス・エシックスにおける異文化間コンフリクトを考える」では、アロイス・モースミュラー氏とシルビア・ゴンザレス氏が研究発表を、島田信吾氏がコメントと問題提起を行った。モースミュラー氏はホワイトの「企業人間」が経営者と被雇用者との利害対立を隠蔽したように、現在求められている人間像としての「グローバル企業人間」も文化の多様性などの問題の本質を隠蔽してしまうことを指摘し、ゴンザレス氏はグローバリゼーションによって引き起こされた負の側面を、メキシコのマキラドラなどの事例をあげつつ問題提起した。

今回の国際シンポジウムは日本経営倫理学会の後援も得て、多様な研究分野の研究者や企業人などが共に議論し交流する場を提供した。とりわけ、グリュンシュロス氏が記念講演の中でビジネスにおける「多様性」を強調し、モースミュラー氏がその概念の導入自体がアメリカ的視点を前提にしていること、それによって隠蔽される文化論の問題もあることを示したことは、本研究所がグローバリゼーションやビジネス・エシックスなどのテーマに取り組む上でも示唆的であり、非常に貴重な機会であったといえる。

●共同研究プロジェクト公開ワークショップ「EPAと外国人看護師・介護福祉士候補——背景・実態・課題」

(2010年2月13・14日、於：専門学校神田外語学院本館)

主催：神田外語大学異文化コミュニケーション研究所

協力：クロスカルチュラルケアネットワーク(CCCN)(東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター／ミニ研究プロジェクト勉強会)

〈第1日目：若手研究者による報告会〉

1. 合地幸子(東京外国語大学大学院博士前期課程)

「インドネシア人看護学生の考える高齢者介護と高齢者の抱く介護観——意識調査の結果をもとに」

2. ケリ、イメルダ(立教大学大学院博士課程・もと日本語教師)
“The Japanese Language and Caregiver Program in the Philippines.”
(フィリピンにおける日本語・介護教育の現状)
3. 湯川志保(大阪大学国際公共政策研究科博士後期課程)
「言語能力が外国人労働者の賃金・就業に与える影響」
4. 宮田翔平(東京経済大学大学院現代法学研究科修士課程)
「インドネシア人候補者受け入れシステムの構造的問題点と受け入れ施設の意識に関する研究」
5. 露木小百合(東京外国語大学大学院博士前期課程)
「インドネシア人候補者受け入れ機関の経験と課題」
6. 上杉祐子(横浜 YMCA 日本語講師・東京外国語大学多言語多文化教育センターフェロー)
「介護職における OJT(オン・ザ・ジョブ・トレーニング)としての日本語教育」
7. 奥田尚甲(広島大学大学院博士後期課程)
「看護師国家試験と基本的な日本語能力——看護師国家試験の語彙を通して」
8. 齋藤 隆(神田外語大学大学院博士前期課程・もと地方公務員)
「外国人看護師が国家試験に合格するために必要な日本語能力——看護師国家試験問題の分析から」

〈第2日目: 本会〉

報告 1. 松野明久(大阪大学)

「インドネシア EPA と看護師・介護福祉士候補来日——労働力移動と外交」

報告 2. 宣 元錫(中央大学)

「EPA による看護師・介護人材の受入れと日本の外国人労働者政策」

報告 3. 中井久子(大阪人間科学大学)

「フィリピンの介護教育と看護・介護学生の日本への就労意識」

報告 4. 高畑 幸(広島国際学院大学)

「フィリピン人の介護労働への集積——在日フィリピン人、新日系人、EPA 研修生」

報告 5. 本田隼人・野村愛 ((株) キーマックスマリタイム／アSEND 教育財団)

「フィリピン人介護人材育成プロジェクト」

報告 6. 奥島美夏 (神田外語大学)

「インドネシア人看護師・介護福祉士候補者の就労条件と実態」

報告 7. 高津康子 (学校法人長沼スクール東京日本語学校)

「インドネシア・フィリピン人介護福祉士候補の日本語教育と国家試験をめざしての学習報告」

総合討論「支援・教育・報道の課題」

提題者: 鈴木伸枝 (千葉大学)

熊田佳代子 (NHK 名古屋放送局)

青山 亨 (東京外国語大学)

自由民主党時代の医療・福祉分野を含めた財政改革の一環として、また石油確保の戦略として、2008 年から EPA を通じた外国人看護師・介護福祉士候補受け入れが始まった。当初から受け入れや態勢不備を巡る論議は多く、また本国側の動向や問題についても十分に先行調査がなされていないまま受け入れだけが進められ、09 年秋の政権交代も重なって混迷を深めている。

本ワークショップは本研究所共同研究プロジェクトおよび関連研究成果をもとに、インドネシア人候補者第 2 陣、フィリピン人候補者第 1 陣が就労を開始した現在、特定集団・地域に偏りがちな研究・支援をみなおしつつ問題整理を行うとともに、今後の制度改革、支援、その他の諸問題を模索することをめざして開かれた。また、受け入れ諸機関や日本語指導の関係者、また本主題を研究する若手研究者も増え、多様な現場からの需要が高まっている。

来場者は両日でのべ 400 人にのぼり、研究教育分野だけでなく厚生労働省・外務省・経済産業省、日本語学校、病院・介護施設、メディアなどが

らも多数の関係者を迎えて論議することが叶った。なお、本会関連記事は『月刊ケアマネジメント』2010年3月号、『月刊インドネシア』（日本インドネシア協会ニュースレター）2010年1・4～6月号、『AGURA』（キーマックス・アセンド教育財団ニュースレター）7号（2010年4月）などにも取り上げられている。